授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2341 号

Birth weight reference for Japanese twins and risk factor of infant mortality: A population based study

日本の双胎妊娠における出生体重標準曲線と乳児死亡のリスクの検討

石田 ゆり（いしだ　ゆり）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、厚生労働省の人口動態調査票出生票、死産票のデータを用いて、新規の双胎出生体重標準曲線を作成し、さらに出生体重別、在胎週数別の新生児死亡・乳児死亡のリスクを検討したものである。提供されたデータより 469,064 件を抽出・解析し、B spline function を用いて標準曲線を作成した。1988-1991 年のデータをもとに作成された既報と比較したところ、いずれも 100-200 g 程度平均出生体重が減少していた。新生児死亡率および乳児死亡率が最も低かったのは、出生体重: 1500-2499g 群、在胎週数: 34-36 週群であった。特筆すべきは単胎では正常と考える出生体重 2500-3999g 群と在胎週数 37-39 週群で、生後 29 日以降の乳児死亡の頻度が高く、出生体重 3500g を超えた児の新生児死亡が多いことである。 双胎の出生体重減少は、近年の単胎と同様の傾向である。また正期産・正常出生体重児で生後 29 日以降の乳児死亡の頻度が高いのは、正常新生児として取り扱われ、母親が十分な双胎の育児指導を受けずに退院した児に、家庭内で不慮の事故や乳幼児突然死症候群が発生しやすい可能性を考えた。また 3500g を超えて出生した児の新生児死亡が多いのは、双胎間輸血症候群の受血児が含まれている可能性を考えた。本論文は、双胎の新規出生体重標準曲線を作成し、正期産・正常出生体重児の生後 29 日以降の乳児死亡率が高く、出生体重 3500g を超えた児の新生児死亡が多いことを初めて明らかにした臨床的に意義あるものである。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。